

ユナシン 12g/チゲサイクリン (チゲシル) 司会のことば

¹長崎大学病院

河野 茂¹

ペニシリンの発見以降、人類は半世紀の間にサルファ剤、アミノグリコシド、マクロライド、テトラサイクリン、キノロン、オキサゾリジノンなど多くの薬剤を発見、開発し、臨床の場で使用することで良好な治療成績を挙げてきた。先進国において感染症は過去の病気であり、人類は感染症を克服したとさえ思われるようになってきた。しかし、近年、国内外の医療現場において、MRSA や VRE などに加え、多剤耐性グラム陰性桿菌が問題となりつつある。一方で、新規抗菌薬の開発は勢いを潜め、過去の開発が盛んな時期と比べると遠く及ばないのが現状である。現在直面している耐性菌の問題を解決するには、産官学が協力して新規抗菌薬の開発を推進するとともに、抗菌薬の薬物動態、抗菌スペクトル、耐性機序、Pharmacokinetics-Pharmacodynamics (PK-PD) 等を考慮した古くから使われている抗菌薬の適正使用に加え、新規抗菌薬が今後長く使用出来るよう耐性化を防ぐための適正使用について、我々医療従事者が共通認識をもち感染症治療に取り組むことが必要である。本シンポジウムでは古くから使われている抗菌薬と新規抗菌薬の 2 つのセッションを設け、1) 1994 年に発売されて以来、肺炎治療の標準的治療薬として使用されている β -ラクタマーゼ阻害薬配合注射用ペニシリン系抗菌薬であるスルバクタムナトリウム・アンピシリンナトリウムの 12g (高用量) 承認による肺炎治療の新たな可能性と 2) これまで国内に治療薬が存在せず、社会的話題となったアシネトバクターなどの「多剤耐性グラム陰性菌」に対する新たな治療薬としてグリシルサイクリン系抗菌薬であるチゲサイクリンに関して紹介する。本シンポジウムでは、両剤の開発の背景、治験結果に加え、実臨床における両剤の適正使用について言及し、多くの臨床医の診療に役立つものになることを期待する。